山崎丈夫さんの訃報に接して

学童保育運動と東海自治体問題研究所

佐藤　尚子
岐阜市常磐校区民生委員
元名古屋市学童保育連絡協議会事務局長

山崎さんの訃報を聞き、自分が不義理をしている！ととっさに思った。義理を果たすには、「私が経験したことを言葉にすることだ」と、もう一人の私は言う。そんなわけで30年も前の私の経験と山崎さんを通した研究所の関係をお話し、感謝の意を表します。ただし、資料はすでに処分しており、私の記憶に頼ってのことでして、不明な点もあります。

いまはむかし、学童保育がなかったころ、働く父母たちは子どもがひとりで放課後をすごすことに不安を持ち、学童保育を共同でつくる運動がはじまりました（「学童保育」という言葉は父母たちがつけた名称で、現在では「放課後児童クラブ」という）。名古屋市においては、父母（住民）たちの請願が採択され1997年に「留守家庭児童育成会」という助成事業が作られました。助成を受けるには必要とする父母たちが、４つの条件を整えなければなりません。場所（保育室）・人（指導員）・15人以上の子ども、そして地域役職者が過半数を占める運営委員会があること。保育室探し等も難儀な課題ですが、地域役職者といわれる民生委員や区政協力委員の人たちが過半数を占める運営委員会をつくることはもっと難儀な重たい課題でした。地域役職者の方の家に躊躇しながら訪問し、趣旨を話す。父母たちの多くは昼間不在のいわゆる「新住民」と呼ばれる人です。学童保育という場の必要性を理解されたとしても、どこの誰だかわからぬ人たちの要求・継続性のある事業運営の一端を担うということに、そうやすやすと同意できるものではないだろう。役職者の方々も行政に相談に行き、役職者の会議で相談され等を繰り返しての返事であったと思います。それ以前に父母たちの間には、地域役職者をどうとらえるのか、なかには保守党議員の看板が門前に立ててある家だ。地域役職者を、地域運営委員会をどうとらえるのかは大きな問題でした。

当時の連絡会の役員の方たちは、助成要綱や地域役職者をどうとらえるのか、東海自治体問題研究所のドアをたたいたのです。対応してくださった人は、中田實先生と山崎さんだったと聞いています。先生たちは澄んだ眼で地域役職者のあるべき姿を語られたのだと思います。地域役職者はその地域の住民の暮らしを見守り、地域や暮らしの不具合を代表して行政に伝え改善を促す役を持つと。連絡会は連絡協議会となり、地域役職者は願いを拒む役ではなく、逆に自治体や国に住民の要望を伝える役をもつという、この視点で学習会をどんどんすすめました。先生たちの的確なアドバイスは、名古屋市の学童保育運動を量的にも質的にも飛躍したと思っています。全国の学童保育運動の中でも光っていました。

国に制度がないなか、父母たちは各自治体へと運動を強めます。助成制度がつくられたとしても、父母たちが運営する会に直接助成する制度はまれで、多くは地域役職者で構成する運営委員会助成でした。この地域役職者の協力が得られず助成を受けられないところが多くありました。名古屋市ではほぼ全小学

校区に学童保育ができました。学童保育の開所式に地域役職者の方が「ようやくうちの学区に学童保育ができました」とあいさつされることもありました。

私は市内に130か所ぐらいの学童保育があったころ（1988年）に、連絡協議会の専従職員になりました。そのときの連絡協議会は「助成金を増額せよ」の要求から「市が公的責任をもつ制度」の確立へと基軸を転換させていました。毎年、市議会に請願し50万署名を目標とする大運動を始めていました。私が入ったのは大運動の２年目、「制度化を求める大運動」と称した運動はその後10年続けるのです。署名に明け暮れする父母や指導員ではありましたが、ほんとうに多くの人びとから署名を得ることができました。初年度は43万筆が、翌年からは46万筆ほどの署名をいただきました。私が専従職員になってから一番最初に山崎さんとかかわったのは、「助成要綱とは何か」「請願するとはどういうこと？」と質問し山崎さんが話してくれました。すぐに自治研の会員になり、わからないことは研究所に電話しました。父母たちが地域で貸してもらえる土地を見つけたら市はプレハブを建てる制度もできるが、土地に関する相談を受けても未知の世界。山崎さんに聞くと、「土地には用途が決まっている」といわれ、名古屋市の職員さんを紹介してくれ、仕事が終わった後聞きに行ったこともありました。自治体への関心も、かかわりもなかった者が住民運動団体の専従となって、請願と陳情のちがいすら知らないものを、山崎さんはあきれることなく根気よく教えてくれたのです。それは大きな支えでした。

請願提出後の議会各会派まわりや懇談の場面ででくわす言葉。「おまえたちはどういう団体か？」「ええー！（どういう団体？用紙に書いてあるだろう）「学童保育の充実を願う地域の住民と職員がつくる団体です」「それはわかるが、社会的に認知された団体かと聞いているんだ」請願は誰でもやれる国民の権利なのに、認知された団体しかやれないというのだろうか？何を聞かれているか、さっぱりわからない。この質問はマスコミからも聞かれた。「自発的に作られた任意団体」と返事をするようになりましたが、お門違いだったかな。

保守会派ではもっとわけのわからぬことを言われた。「おまえたちはええことしてできた子どもを、面倒みろとは勝手がよすぎる」と。この議員は何が言いたいのか？女性も働き続けたい、あるいは働かざるを得ないひとり親家庭だってある。その子どもが「かぎっ子」とよばれる状態になる。危険だってあるなか、安心してすごせる場が欲しいというあたりまえ気持ちが、なぜ、わからないのだろうか。いやらしさと不信感を持ちました。

それらのことを「反共攻撃」と表現することをしばらくしてから知りました。私の子どもが通っていた学童保育は、地域運営委員会がなかなかできなかった。父母や指導員が難儀をしている姿に見かねた民生委員長が、区政協力委員長を説得してくれて助成を受けられるようになりました。その門出を祝おうと民生委員長が懇親会を設けてくれた。私は入り口で役職者を迎える役、ある人がひそひそ声で「ここにいるのはみんなアカだって！」と聞こえた。あーあ、私たちはこういうふうにみられているのだ。当たり前の願いを実現しようと奔走する人たちを、アカとみて切り捨て他の住民と分断させようとする。寂しかった。それと同じようなことが議会では起きていたのだろう。どこの団体？という質問もそうだろう。働く女性にたいする無理解、おんなが男と同等に働くことはけしからん。男の甲斐性が下がるとでも。今思えば、社会が変化していくことの憤りを、運動団体をアカ呼ばわりしていやがらせや地域の中でみせしめにさせるものだったと思います。私たちは「こどもまつり」や「餅つきバザー」などをし、学区の子どもたちや人びとの楽しみを増

やしていきました。

私たちは山崎さんと中田先生から教えていただいた地域役職者の役割のひとつである意見具申・行政や国に意見を述べるということにも注目していました。意見具申に学童保育の改善要望を反映させてほしいと願い、署名運動時に請願項目に賛同していただく「賛同署名」も重視しました。学童保育の実態を常に地域役職者にお話しし力になってもらいました。それが毎年、どこかの区の民生委員協議会から、運動の後半ではいくつかの協議会や区政協力委員会からも、助成金の増額要望や保育室の改善要望などがだされました。市議会請願は保留という扱いが続きました。制度化を求める大運動９年目、請願は保留となり、同時に予算削減の付帯決議がつきました。翌年はこの付帯決議に危機感を持ち、50万筆の署名と役職者の賛同署名3,000筆をやりきりました。

そのころ国レベルでは学童保育の制度化の検討が始まっており、国に制度ができそうだという期待と民活が強調されるなかでの不安が入り混じっておりました。ついに1998年に社会福祉事業法（のちに社会福祉法に改名）に学童保育（放課後児童クラブ）が位置付けられました。社会福祉の構造改革は始まっており、「実施主体の多様化」・株式会社もできる事業になり、暗たんたる思いでいました。

さて、名古屋市においては地域に学童保育ができ20年以上たつも、地域役職者の協力が得られず未助成の学童保育があり、この問題は国が法制化しても残ったままでした。「未助成学童保育も使える制度を作れ」と市に要望しました。市は区政協力委員長に対し「国に制度ができる事業だから認めてくれ」というような説得をされたと聞きました。これですべての学童保育に助成がいくようになりました。私は情緒不安定になり連絡協議会を退職しました。

振り返って思うことは、

①自治体について素人のものが、住民運動団体の専従となり、住民自治を学ぶ場として東海自治体問題研究所があり、特に山崎さんから教えてもらったこと、支えていただいたことを忘れない。

②特に地域役職者をどうとらえるか、その教えがあったからこそ、名古屋の学童保育はほぼ全学区に住民がつくることができた

③②の最も大事なこと、地域のことは地域で考える、できることは住民が共同してやることを、学童保育連絡協議会は愚直にも追及してきた。あの付帯決議は恐ろしかったが、はねかえすことができたのは市民の世論と地域役職者の方々が市に声を伝え続けてくれたからだと思っている。

④山崎さんや中田先生の教えを受け、地域の学童保育の父母たちは地域から役職の話がきたら請け、地域を構成する一員として地域運営に参加していった。すばらしき父母、住民たちだった。

そして私も名古屋市で民生委員を13年勤め、岐阜市の農村に転居し5年目に民生委員の依頼が来た。新人だからと断るも、「血縁が残る地域だからこそ、新人がいいのです」と言われて受けてしまった。ここでは民生委員は自治会の月1回ある組長会にでることになっている。名古屋にいたころは、民生の仕事を孤独にやるしかなかったが、ここでは会長や組長が助けてくれる。自治会運営に参加していて、中田先生が言われる「住民自治と地域共同管理」という課題をイメージできる。住民自治を耕すこと、住民がきがねなく集える場づくり、公民館で楽しそうなことをしてるよ、コミュバスに乗って地域巡りをしよう、みんなが地域を好きになれば人が持っている役立ちたい思いが湧き出るだろうね。そんなことをはじめています。山崎さん、ありがとう！田んぼと柿畑、その先にある里山をみながら山崎さんの笑顔を思い浮かべます。ありがとう！ありがとうございました。（了）